

翡翠

翡翠

須江春子

新星書房刊

歌 集
翡 翠

女人短歌叢書第 500 篇

昭和六十三年三月五日 印刷
昭和六十三年三月十八日 發行

定価二五〇〇円

送料 二五〇円

郵便番号 一七六

東京都練馬区中村南三一―四―五

電話 〇三―九九八―八四〇二

著 者 須 江 春 子

発行者 伊 藤 幸 子

郵便番号 一七六

東京都練馬区中村北四―七―一〇

発行所

新 星 書 房

電話（九九九）四六八五番

振替東京一八三二七八番

序

昨年五月花菖蒲の盛りの平安神宮拝殿で喜寿を迎えた昔の教え子達と共に神官の祝詞を聞きながら思わず目頭があつくなり、戦中戦後をみなそれぞれ大変な苦難を克服し生きぬき今元気で六十余名も集まり得た幸福を祝し合ったあの大きな感激は生涯忘れる事は出来ないと思います。あの時神苑で須江さんと撮った写真に添えて「米寿の師喜寿のわれらの同期生祝ぐ喜びの平安神宮」の歌が書かれこれを今度の歌集に載せるつもりだから私には是非一言書いてほしいとの須江さんからのお便りがあり驚きました。私にはまことに思いもかけぬ事でこんな事は初めての事、又そんな所に書ける柄でもないで固くお断りしたのですが電話で強いての御依頼でもあり又前の三歌集共頂戴して居り、今度又第四集を出される事は心から祝福申

上げたい事なので断りきれず拙い言葉ですがお喜びの気持を述べる事にしました。須江さんの堀川高女時代私が担任をしたのは六十年も昔の一二年生の可愛頃で、当時の井手さんは格別無邪気で素直、級友からも愛される目立った存在で特に週一回宛出される日記の美文は大変興味深く楽しみに拝見した記憶がはっきり残っています。五人の優秀な兄上達から末娘として大変可愛がられ睦まじい御家庭の様がよく伺えました。歌集天壇の次の歌でも明らかです「三高の寮歌口誦めば青春の学生服の亡兄の浮び来」京の家に育ち睦びしその頃の優しき亡兄のしきりに思はる」

卒業後幸福な家庭を持たれ台湾に行かれてからしばらく音信が絶え、戦後東京の国会図書館で頑張っていられる頃お会いし、戦争で大変な苦難を乗り越えて来られた事やその頃から和歌の道に進み精進されている話も承りました。退職後は本格的にこの道一筋に励まれ「ひとり旅」「天壇」「再見」と旅する毎に、又長い病院生活の中でも歌を詠み続けて三歌集も相ついで

上梓されるその大変な御精進振りには深い感銘を受け敬服していました。昨夏出版の現代短歌集成にも全国的に選ばれた歌人達の中に須江さんの最近の十二首が出されているのを見て、平素この道には疎い私は改めて須江さんの斯道での活躍振りを思い心からお喜びし又須江さんを教え子に持った事に誇りを感じる思いでした。須江さんの和歌はいつもつくるといふ感じではなく、自然に心の中から口について流れ出ると言った感じで、技巧のあとが見えない快いひびきがあり、目にふれ心に映るものがすべて三十一文字になって自然に言葉のように出るというようで、この道に長年精進されたからこそいつも心を打たれる思いです。又再見の歌集に見る「米どころ秋田平野をめぐり来て青田刈せし跡の痛まし」「切々と残留孤児の哀しみの声に戦後は未だ終らず」のような、温い心がこもっている歌が多い事にも心ひかれますが生来の純真さに加え、戦争での大試練に立派に打ちかって来られた今、御息女の一家の温い幸福な家庭で、歌三昧の境地に

ある作者の人柄の表れと思えて実にうれしい気がします。歌集再見の題字がお孫様で、この度の翡翠を含めた四歌集全部のカットが御息女の考案という実に温い気持ちのこもった歌集である事でも頷けます。今度の歌集中のわが胸に飾る翡翠のペンダントカナダ楓の形に彩なす

杳くなる亡夫と住ひし台北の思ひ出語る履門の翡翠

は結婚後、台湾総督府に赴任された一番幸福な頃の思出で、感慨無量の感じがよく出ていて、天壇歌集中の「広大な官舎に椰子の大樹ありバナナも実るパパイヤもなる」と詠った歌も偲ばれて来ます。

かはせみを動物園に探しきぬ小鳥の小舎を余さず歩く

この歌には、数年前の大手術後すっかり健康を恢復した作者の最近の幸福な歌三昧の生活の中、如何に真剣に歌作に取り組んでいられるかが伺われてうれしい気がします。今度の翡翠の中には数百首のせられるという事ですが、その中の少しを拝見しただけでよくわかりますが、喜寿を迎えて

現在大変御幸福な恵まれた立場に居られる須江さんの、歌そのものが生活、生活のすべてが歌といった感じの中から、さぞかし多くの素晴らしき、心を打たれる歌が出来、拝見することが出来ると楽しみにしています。

山 添 さ と

目次

一九八二年三月—一九八七年十二月

序文	山添 さと
題字	中西 春子
書歌	曾野 寿子
翡翠	
赤坂御苑	
長沢美津先生傘寿を祝ぐ	
アメリカの友	
教会	

二五 二九 七五

修道院

亡夫須江英雄四十回忌

亡母三十三回忌

亡兄の七回忌

挽歌

故遠藤敬三百世御夫妻

松岡清氏を悼む

故土方久顯氏

義弟万代淑郎氏を悼む

寺山修司氏の訃を知りて

松岡夫人御母堂告別式

池田民子夫人を悼む

浅田静江様を悼む

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

新青梅街道
 朝の散歩
 移る季節
 四季折々
 牡丹と桜
 春を待つ雪
 春となりて
 暑中のたより
 古稀を過ぎ
 相 撲
 有楽町
 反核の署名
 老女の易者

九 八 六 四 二 一 五 七 九 三 二 五 七

夏の日	三
残暑の庭	六
実生の枇杷	九
郵便のくる時刻	一三
まなざし	一七
鍵をたしかに	一九
秋を待つ	二一
黄河文明展	二五
京都四季展	二七
ゆかり会	二九
雨の川下り	三三
浜公園	三五
南窓会	三九

山田信様送別	一三
或る女友の話	一四
帰郷 春	一五
帰郷 秋	一六
吉田山	一七
三方五湖	一八
若狭路を行く	一九
梅雨の恵那峡	二〇
木曾路	二一
初秋の伊豆	二二
秋の秩父	二三
仙台の旅	二四
深大寺	二五

一三
 一四
 一五
 一六
 一七
 一八
 一九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五

友の病む

図書館の友

上野美術館

動物園

高女の師 山添さと先生

飛行機事故に思ふ

あとがき

カバー絵 竹中 喬子

翡

翠

